

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.11 / 2006年 秋

先生っていうのは、
学校で子どもとなかよくしているのが
仕事なんじゃないんですか。

地球となかよしインタビュー
できない子の側から教育を見直す 山田洋次

知っておきたい教育NOW
変わる教員養成・免許制度 野村新
小中一貫教育への期待 天笠茂

名人の授業 ―有田和正先生―

地球となかよしトピックス 大きな家族「バーンロムサイ」 名取美和

インフォメーション北から南から

BOOK REVIEW eコラム10代心のカルテ その 香山ツカ

ほっとな出会い 清水市代





地球となかよし
インタビュー

できない子の側から教育を見直す 山田洋次さん（映画監督）

渥美清さんのようなできの悪い生徒の味方になってくれる先生が、一つの学校に二人ぐらいはいてほしいですね。

新作「武士の一分」の完成おめでとう
ございます。山田監督の時代劇の三作目
で、原作はいずれも藤沢周平の小説です
が、藤沢作品の魅力は何でしょうか。

そうですね、藤沢作品の主役は権力者
ではないというところかな。司馬遼太郎
や山本周五郎は優れた作家でばくも愛読
していますが、主人公には大名や旗本、
大将、司令官といった身分の高い人がし
ば登場する。というより、権力者を
描くことに興味をもっておられる節があ
る。しかし藤沢さんの小説の主役は徹底
して下級武士が裏長屋住いのつましい職
人とその家族たちです。つまり、今はす
たれた言葉ですが庶民、または民衆の低
い目線で世の中や人間を見つめる、とい
うことを貫いた素晴らしい人です。暖か
くて優しく、読む人の心を慰めてくれる。
チエーホフの小説は癒しの文学といわれ
ますが、藤沢さんは日本のチエーホフで
しょうね。

この映画も、藩主の毒見役を務める下
級武士が主人公ですが、主役に抜擢され
た木村拓哉さんの演技はいかがでしたか。

テレビの画面を通してですが、木村拓
哉君というのは、他のタレントとちよつ
と違う目をしている。もしかして物事を
きちんと思えることができる青年ではな
いか、とぼくは考えていました。実際会
って話をしてみたらなかなかです。有名
スターで高い金を手にしていい気になっ
ているような人間では全然ない。ぼくは
すぐに気に入りました。

はじめて付き合う俳優とは最初から気
が合うわけにはいきません。渥美清だつて
高倉健だつて最初はなかなかうまく行か
なかった。ああでもない、こうでもない
と試行錯誤の日を重ねる中でじわじわと
お互いが理解しあえるようになる。その
根本は、ともに同じ夢を見ること、つま
り一つのイメージを抱きあつてですね。
ア、そうか、そうなんだ、判った、あな
たが表現したいのはこういうことなんで
すね、という風に俳優が捉えてくれると
きを粘り強く待つというのかな。そうい
う段階を超えると、俳優はぼくが思うよ
うに演じてくれるし、時としてそれ以上
ぼくが想像もしなかったような素晴らしい
表現をしてくれたりするものなのです。
学校の授業も同じことが言えるかもし

れませんね。教師と生徒との間に本物の
深い信頼関係ができれば、教師は黙って
立っていても生徒はいま先生がなにをイ
メージしているかが想像できて、静かだ
けど和やかな、充実した授業ができるの
でしょう。

教育の話題で言えば、いま少年事件や
親殺し・子殺しなど家庭崩壊を思わせる
事件が相次いでいますが、監督はどのよ
うに受けとめておられますか？

二つの考え方をぼくはします。一つ
はその事件を今日のマスコミが
興味本位に大きく取り上げすぎ
るということ。これでもかこれ
でもかと刺激的な記事や画面を
見せつけて、こんなに家族は
崩壊している、地域は破壊され
ていると無責任にわめき散らし、
読者もそんな気分誘われて、まあなん
てひどいと話題にし、それに比べてわが
家は平和でよかった、という偏狭なエゴ
イズムの中に閉じこもる。家庭内の殺人
は昔だつてあったことなのに。あなたの
周りには危険に満ち溢れている、地域だけ
ではない、北朝鮮だつて、中国だつて危
ない、といった種類の恐怖心の押し付け
は、国家主義に連なる怖い思想だと思
います。

もう一つは、やはり家族同士のコミュニ

山田洋次監督 プロフィール

1931年大阪出身。東京大学卒業。1954年
助監督として松竹大船撮影所入社。1961
年『二階の他人』で監督デビュー。国民
的シリーズ『男はつらいよ』全48作をは
じめ、『家族』（70年）『同胞』（75年）
『幸福の黄色いハンカチ』（77年）『息子』
（91年）『学校』（93年）など多数。

1996年紫綬褒章、2004年文化功労者。
藤沢周平原作本格時代劇『たそが
れ清兵衛』（02年）は日本アカ
デミー賞をはじめ数々の日本
の映画賞を受賞。最新作
『武士の一分』は12月
1日全国一斉ロード
ショー。



ニケーション欠落でしょうね。核家族化
がはじまって二十年から三十年が過ぎ、
その中で育った子どもたちが親になって、
本格的な家族の断絶が起きているんじゃない
でしょうか。寅さん映画を作ってい
た時代は「そうなんだ、こんな風に人と
人とが愛し合い、仲良くなるための面倒
な努力をしながら社会は成り立つんだな」
という思いで観客は満足してくれたんだ
けど。今の若者たちとその思いを共有で



●映画「武士の一分」より(<http://www.ichibun.jp>)
© 2006「武士の一分」製作委員会

きるのだろうか?と不安になるのです。何故か、日本人は皆くたびれ果て、息を切られて毎日をゆとりなく過ごしている。人と人が深く関わりあう時間が無い。それは学校の先生にも言えることではないんです。書類を書いたり報告書を提出したり、という仕事が多くて子どもと一緒にいる時間が奪われている。子どもは先生の生活を独り占めにしていたいと願うものなのです。先生の仕事はそんな生徒とたづねつきあうことではないかとぼくは思うのですが。



もう一つ、働かない若者の増加が深刻な社会問題となっています。

はつきり言えることですが若者が希望をもてない国になっています。年間三万人の世界有数の自殺大国。性格も才能も違うさまざまな若者達が、それぞれに見合った仕事がいっかには与えられるんだという希望がほとんどない。一握りのエリートがいればあとは言うことをよくきいて働くフリーターかアルバイトがいればいい、といったような発言を政府の高官がしたりする国。日本の産業の構造がそのような方向に向いていることに大きな問題がある。若者たちが働き甲斐のないニート暮らしの中で絶望的に生きざるを得ない、という状況は国家的な大問題だとぼくは思います。

寅さんは半失業者で年中ふらふらしている変な男でしたが、今やそれが特別ではない、ちつとも変ではない。寅さんのような立場の若者が今はいっぱいいる、ということではないのでしょうか。

日本の子どもたちの学力低下が指摘されていますが、監督はどのような感じになっていますか。

何年か前、「学校」という映画をつくるために、中学校三年生のクラスで一週間授業を受けたことがあります。子どもたちを見てみると、半数ぐらいが授業の内容を理解していませんね。勉強しようという気はあるけれど、授業についていけない。また、雑誌や漫画などを読んで全然勉強する気のない子が一割ぐらいいます。こう

いう子は、まったく学ぶことをしないまま卒業していく。本当に可哀想です。

文部科学省のエリート官僚に、このような勉強が判らない子どもたちの悲しみが果たして理解できるのだろうか? 渥美清さんのような人だったら判る。あの人はすく頭がいいけれど子どもの頃はまったく勉強ができなかった。体が弱くて欠席が多かったせいもあるけど、そもそも学校の成績で競争するというような下らないことに興味がなかった人。そんな成績の悪い子どもたちの気持ちをきちんと理解できてしかも優れた人が、日本の教育のことを、今の学校教育のどこが問題かを、それこそ命がけて考え、悩むことが必要じゃないでしょうか。

最後に、監督が子どもたちにどうしても伝えたいことがありましたら、ぜひお聞かせください。

撮影のために一週間通った中学校で、朝から夕方まで授業を受けていると、クラスの子となかよくなるわけですよ。まわりの子を見ていると、一生懸命勉強しているんだけれど答えを間違えている子がいる。そんな子には休み時間に、「君、ここが違ってたぜ」と忠告する。また、さつきも言ったけれど、膝の上に漫画を広げてまったく授業を聞いていない茶髪の子もいる。ぼくはそういう子たちと膝を突き合わせて付き合ってたやらないなっと思いました。授業から取り残された子どもたちがかわいそうで仕方なかった。この子らは、これから一体どうなっていくのだろう。一人前の社会人になれるのだろうか。この子どもたちに少しでも考える力をつけるためには授業をサポートする人が必要だと思いました。つまり、

先生の助手が教室にいたら子どもたちはうんと助かるし、また教師も負担が減ると思います。そのための予算などこの国の膨大な予算を考えれば、たとえば世界有数の軍費をほんの少し削ればいい、それによって子どもたちがどれほど幸せになることでしょうか。基礎学力がつかないままに、いやそれどころかほとんど出席しない子にも卒業証書を渡すなどということでは、できない子どもが可哀想過ぎます。それは憲法で保障された教育を保障する義務の違反です。

渥美清さんは小中学校を通じて常に一番ビリか、ビリから二番目だったそうです。むかしの成績は甲乙丙丁でしたが、彼は丙が六つあったから、丙六というあだ名だった。これは彼のかつての同級生から聞いた話です。だから彼には成績の悪い子どもたちの気持ちがよくわかるんですね。

ロケーション中に、渥美さんの周りに中学生・高校生の不良少年が不思議と集まってくる。その光景を端で見てみると、実におもしろい。渥美さんが彼らをからかうんですよ。そのダボダボのズボンはどうなっているのかとか、変わった上着を着ているとか、ちよつと帽子を脱いで見せるとかね。みんな恥ずかしそうにしている。少年たちはたちまち従順な子分みたいになっちゃう。信頼しているんですよ、この人は味方だ。寅さんの役だからというのじゃなくて、渥美さんの人格を一目で見取っちゃう。この人は秀才やエリートより俺らの側に立っている人なんだということをね。

渥美さんのような、できの悪い生徒の味方になってくれる先生が、一つの学校に二人ぐらいいたら、子どもたちはどんなに学校が楽しくなるでしょうね。

変わる教員養成・免許制度

——更新制の導入をめぐつて——



元大分大学学長・九州栄養福祉大学教授
中教審教員免許制度ワーキンググループ主席 野村 新

■公証性の追求

中教審は、平成十八年七月「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申した。検討事項の一つに「教員免許制度の改革、とりわけ教員免許更新制の導入について」の諮問があり、その答申である。

現在、大多数の教員は使命感や教育愛を持ち、学校教育のプロとして真摯に教育活動に取り組んでいるが、破廉恥な教員や指導力不足の教員等、一部の不適格教員によって、教育職に対する社会的信頼と尊敬が低下している。一方、社会の急激な変化に伴い学校が抱える課題や子どもの変化等に対応できる教員としての資質能力が問い直されている。この状況下で、抜本的な教員養成・免許制度改革によって、専門職としての教員の資質が保証され、教師が自信と誇りを持ち、社会的に尊敬され信頼され得る公証性の追求が、本答申の一つの特質である。

そのため、教員免許状の性格づけを改めて規定するとともに、それに対応した学部段階の教員養成課程の構造改革を法令化し、それを前提とした更新制導入、教職大学院の創設を答申した。

■教員養成の現状と課題

本答申では、戦後から現在までの教員養成制度の

原則の「大学での教員養成」「開放制」「免許主義」を踏襲した。

大学での教員養成は、戦前・戦中の教育技術主義に偏した教員養成の反省から、世界観や人間観、教育観を持ち、主体的に教育目標・内容を検討して教育に当たる、創造性豊かな研究者の探究能力と教育実践力を持った教員の養成を指向して始まった。しかし、現実には、教科専門科目と教職専門科目を講ずれば、予定調和的に優れた教員が養成されるとして、その統合化は受講する学生に委ねて、教員としての資質能力を形成するための統合化を、組織的・計画的に追求した大学はほとんどなかった。

開放制は、国立の教員養成大学・学部だけではなく、国・公・私立の一般大学でも教員養成がなされる制度である。学校は、いろいろな個性を持った子どもの集う場であり、それに対応した教員構成として、かつてのステレオタイプ化した師範タイプの教員批判から、個性的な教員の養成として開放制がとられた。しかし、現実には、開放制イコール国・公・私立大学での教員養成と受け取られたり、所定の単位を修得すれば容易に教員免許が取得できる免許状の乱発などが起こり、教員免許不信を招いた。

そうした中で、教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（平成九年七月）では、現代の教員に求められる資質

能力として、「地球的視野に立つて行動する資質能力」や高度な専門性を求め、「得意分野を持った教員の養成」や採用当初から子どもの前に立てる、教員としての「最小限必要な資質能力」の育成を求めた。第三次答申（平成十一年十二月）では、「養成しようとする教員像を明確に持ち、それを達成するための組織を構成しカリキュラムを編成すること、その組織として「教員養成カリキュラム委員会」の設置を求めた。

しかし、課程認定大学の現状は、以前と変わらず、教員免許法に規定された授業科目を担当教員が個々バラバラに授業して、統合化も体系化もされず、まして教員像を持って教員としての「最小限必要な資質能力」育成のために、全学的な教職指導体制で組織的に取り組んだ大学はほとんどなかった。

■教員免許状の性格づけと養成課程改革

本答申は、これまでの答申を基に、実践化のため、教員養成・免許制度改革の法令化を求めている。

その第一は、教員免許状を「教職生活の全体を通じて、教員として必要な資質能力を確実に保証するもの」と規定したことである。教員免許状は、その性格から、本来、その時代、その社会に対応できる教員としての資質を持ち、公教育を適切に実施することのできる者に授与されるべきもので、その時々、社会や子どもの状況に対応できる教員としての資質能力を担保するものと規定した。

平成十四年答申では、教員免許状の更新制について免許授与時に教員としての適格性が判断されていないことから、「更新時に教員としての適格性を判断する制度をとり得ない」として「なお慎重にならざるを得ない」となった。今回の答申では、免許状の性格づけがなされたわけである。

第二には、教員養成課程を、教員免許状を授与さ

・ 教員免許更新制の導入 ・

・ 趣旨

免許状に有効期限を付し、免許状の取得後も、その時々で求められる教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に必要の刷新（リニューアル）を図るための制度として、更新制を導入

・ 免許状の有効期限 10年間

・ 更新要件

有効期限内に免許更新講習を受講・修了すること
（直近2年間で30時間）
（講習は、使命感や責任感等をもって指導を実践できる力、その時々で必要な資質能力に刷新（リニューアル）する内容）

・ 更新の要件を満たさなかった場合、免許状は失効

（但し、同様の講習の受講により再授与の申請は可能）

・ 現職教員にも更新制を適用

免許状に有効期限は付さないが、10年ごとに同様の講習の受講を義務付け、修了しない場合は免許状は失効

れるに相応しい資質能力を持った者を養成する課程として位置づけ、教職指導体制の構築を求めている。

これによって、各大学は、教員像を明確にして、到達目標である教員としての最小限必要な資質能力形成のため、教職課程すべての教育活動を有機的・統合的に組織する教職指導体制の構築・確立が必須となり、教職指導について全学的に責任を持つ「教員養成カリキュラム委員会」機能の充実・強化を図らねばならない。教育実習も、教職課程の一環として行われるもので、大学の責任ある対応が法令上、明確化された。そのため、教職課程全体の中で体系的な教育実習の実施が必須となり、これまで批判的多かった「丸投げ」の母校実習が許されなくなる。

第三は、抜本的な制度改革とも言つべき、第三のカテゴリーの必修科目「教職実践演習（仮称）」の設置である。この科目は、教職課程の履修を通じて、教員として最小限必要な資質能力の全体を確実に身に付けさせるとともに、資質能力の全体を明示的に確認する科目である。ここで教職課程の教育活動で、使命感や責任感、教育的愛情及び、正しい幼児児童生徒理解に立つて、教科指導や生徒指導が出来る最小限必要な資質能力が、有機的に統合され、形成さ

れたかを、大学が自らの教員像や到達目標に照らして最終的に確認する。したがって、それまでの諸教育活動においても、教員像の形成・最小限必要な資質能力の形成・到達目標の達成のために、有機的・体系的に統合化を図らねばならない。

また、養成課程の事前・事後チェックも厳しく行われる。課程認定審査時において、教員組織や所定の授業科目の審査ばかりか、教員像や教職指導体制の整備等、教員養成の全体像について審査がなされる。課程認定後も、その体制の維持・向上について絶えずチェックされ、結果次第では、是正勧告、課程認定の取り消しもあり得る。

■ 教員免許更新制の導入と更新講習

本答申における更新制は、教員としての資質能力は、本来的に時代の進展に応じて更新が図られるべき性格を有しており、教員免許状の授与段階だけでなく、取得後も、その時々求められる教員として必要な資質能力が確実に保持されるための、刷新（リニューアル）としての更新制である。

現代の激しい社会変化に伴い、子どもの間に、学習意欲の低下や学力・体力の低下、社会性やコミュニケーション能力の低下、いじめや不登校等の学校不適応などが起こっている。また、学習障害（LD）や注意欠陥／多動性障害（ADHD）等、子どもや教育についての研究の進展によって、新しい教育的知見が導き出されている。社会変化によって学校の教育機能も変化している。また、学力観や学習内容の質的变化によって、学習指導要領の改訂がされている。これらに対応する教員としての資質能力の刷新は、不可欠であり、そのための更新制である。

更新制導入は、不適格な教員の排除を直接目的とするものではなく、むしろ、不適格教員をつくり出さないための制度として、その在り方が追求された。

排除には、分限制度がある。しかし、分限免職されるような不適格教員に担任された子どもたちは、長い間、その教員によって犠牲を強いられているわけで、そのようなことが起こらないよう、不適格教員を生み出さない仕組みとしての更新制である。

免許更新講習は、十年ごとに課程認定大学と免許管理者の教育委員会との連携で実施される。免許講習は、その趣旨から教員としての基本的な資質能力と、その時々々の社会状況における子どもの教育や学校の在り方、それに対応する教員としての資質能力の育成についてなされるもので、その修得が確認されて、初めて認定される。更新の要件を満たさない場合は、教員免許状は更新されず、失効するが、更新講習を再受講して認定されれば更新される。教員免許を取得しながら現職教員でない、いわゆる、パーティーチャーターでも、免許取得後十年を経過して免許更新講習（回復講習）を受講し認定されれば、免許は更新される。

更新講習の質を担保するために、講習内容・方法修了目標など、国が認定基準を定め、更新講習者の認定は文部科学大臣が行う。課程認定大学などが更新講習を申請しても、それに適った条件や体制が整備されていないければ認定されないし、認定後も定期的に事後チェックされて、認定基準を満たしていない場合、是正勧告や認定の取り消しもあり得る。

更新制が導入されても、研修は教員としての義務であり、校内研修をはじめ、体系的な行政研修、自主研修などの研修を積んで研鑽と修養に努めなくてはならないことには変わりない。そのために研修体制との関係性も図られる。

この制度改革は、既存の他の教育政策との協働によって初めて、成果が期待できる。いづれにしても、課程認定大学にとっては、厳しい制度改革である。この成否は、教員個々人はもちろん、課程認定大学の努力如何に懸かっている。

小中一貫教育への期待

— 学校と市区町村教育委員会との

関係の再構築 —



千葉大学教授 天笠 茂

■小中一貫教育をめぐる動き

— 問われる市区町村の教育経営力 —

研究開発学校や「教育特区」を中心に組み立てていた小中一貫教育の試みが、広がりを見せつつある。たとえば、千葉県における動きについて、二〇〇六（平成一八）年八月一二日付け読売新聞千葉版は、「鴨川市が小中一貫校検討 県内公立校で初 長狭地区の4校統合」のタイトルのもと鴨川市の動きを報じている。

記事の主な内容は、鴨川市の学校適正規模検討委員会が開かれ、事務局から長狭中学校と地区の三小中学校を統合して小中一貫校とする案が示され、実現すれば県内公立校で初の小中一貫校となる、というものであった。また、計画では、二〇〇七（平成一九）年度に中学校敷地内に小学校校舎を増築し、二〇〇八（平成二〇）年度に小中一貫校を開校するとし、開校時の学校規模は、児童・生徒数は約三二〇人、三年生と七年生が二年級、他の学年は一年級になるとのことである。

一方、二〇〇六（平成一八）年七月二八日、東京都品川区立日野学園を会場にして「小中一貫教育全国サミット2006」と称される会が、小中一貫教育全国連絡協議会の主催により開催された。全国より約一、六〇〇名の教員や教育委員会関係者が集ま

り、京都市、奈良市、呉市、品川区など小中一貫教育に取り組む自治体や学校が、学校組織や教育課程、学校施設などをテーマに、その成果や課題などを報告した。

さらに、石川県の金沢市教育委員会が作成したパンフレット「金沢の教育 平成一八年度」には、市内すべて小中学校で「英語教育」を実施し、小中一貫英語教育の推進をはかっているとの記載がある。ちなみに、同市の示す「小中一貫英語教育カリキュラム」には、小学六年は、中一用教科書を使用し、中学一年の前期程度の英語力をめざすとしている。また、中学三年については、高校一年の前期程度の英語力をめざすと明記している（なお、パンフレットには、他に、「学校二学期制について」、「学習指導要領金沢スタンダードについて」、「中学校学校選択制（通学区域の弾力化）について」など、同市の取り組み教育改革について簡潔な説明がある）。

このような市区町村における小中一貫教育をめぐる活発な動きに対して、国の立場から、中央教育審議会義務教育特別部会「新しい時代の義務教育を創造する」（平成一七年一〇月二六日）は、義務教育に関する制度の見直しについて次のように述べている。すなわち、「研究開発学校や構造改革特別区域などにおける小中一貫教育などの取組の成果を踏まえつつ、たとえば、設置者の判断で九年間の義務教育学校を

設置することの可能性やカリキュラム区分の弾力化など、学校種間の連携・接続を改善するための仕組みについて種々の観点に配慮しつつ十分に検討する必要がある」と。文部科学省の公表するスケジュールでは、議論を重ね、二〇〇七（平成一九）年度には制度改正をめざすとしている。

それにしても、地方分権時代の教育改革は、市区町村教育委員会、さらにいうならば、その教育長の存在を浮かび上がらせることになった。教育改革をめぐるビジョンの構築力や構想力が、また、マネジメントの手腕が、そのまま市区町村の教育改革の展開と実現に大きな影響力を持つようになったということである。

この小中一貫教育が、区市町村における教育改革にどのように位置づけられ、扱われるか、その構想力と今後の推移が注目されることである。

■小中一貫教育のめざすところ

ところで、各地で展開をみせる小中一貫教育は、何をめざしているのだろうか。そのねらいやめざすところについて、主なものをあげてみたい。

第一に、小学校第六学年と中学校第一学年の円滑な接続である。中学校の入学を心理的にかなり高いハードルと意識する子どももいる。この両学年の間、さらには小学校と中学校の段差を、学びへの不安の解消をはかる観点から、教育内容の配列や方法、指導体制などを見直し、滑らかなものにするということである。

第二に、九年間を視野に収めることによって、カリキュラム開発の選択肢や可能性を増やし、また、カリキュラムの弾力的運用の幅を広げ、児童生徒の発達状況に即した在り方を求めるねらいがある。

カリキュラム区分について柔軟にとらえ、子ども達の発達段階に応じて四・三・二とか、四・五とか、

三・三・三など、さまざまな改革プランが提起されている。たとえば、小一・小二・小三・小四を前期、小五・小六・中一を中期、中二・中三を後期、とする「四・三・二カリキュラム」は、広島県呉市や東京都品川区などの研究開発学校における取り組みとして知られるようになった。

第三に、小学校、中学校がそれぞれ維持してきた組織文化を変革し、新たな創造を促すねらいがある。小中一貫教育の推進は、小・中学校の教職員に対して、それぞれの組織文化の違いを乗り越え、新たな創造を求めているといっても過言でない。各地でさまざまな試みが展開されるなか、新たな組織文化の創造をどこまで進めることができるか、そこに小中一貫教育の将来がかかっているといえよう。

第四に、六・三制の制度的な硬直化を見直し、新たな義務教育学校の創設をめざすねらいがある。先に紹介した品川区における小中一貫教育全国サミット二〇〇六年の開催は、九年間の義務教育学校の設置をめざすものであり、その必要性をアピールし、実現に向けて法令の整備などを国に求めるものであった。

第五に、学校の適正な配置や規模について問いかけるねらいもある。適正な配置や規模の確保は、教育行政はもとより学校経営にとっても重要な課題であり、少子化にともなう学校の小規模化は、改めて、この問題への対応を迫っている。これに対して、これまで取られてきた対策の多くは、小規模な小学校を統廃合するものであった。過疎地域を中心に小学校の統廃合が進められてきたことは周知のとおりである。

その意味で、小学校と中学校の統合を通して、学校の適正規模の確保をはかる取り組みは、新たな動きとみてよい。すなわち、小中一貫教育の普及は、地域における学校の適正配置をめくって、また、学校の適正規模に関する論議に新たな展開をもたらす

ことになるであろう。小学校と中学校の統合にあたって、はたしてどのくらいの児童生徒数が適正なのか。九年間の義務教育学校の適正規模をどの程度とするのか。これら課題の究明が、小中一貫教育の進展にあたって欠かせないといえよう。

■小中一貫教育を進める 学校と教育委員会の関係

さて、小中一貫教育を進めるには、学校におけるシステムの開発への取り組み、及び、学校と市区町村教育委員会との緊密な連携が必要である。

まず、小中一貫教育を進める学校は、次にあげる点を中心にシステムの開発に取り組む必要がある。

カリキュラム開発：何はともあれ、教育内容の配列の工夫、小・中学生の交流や異学年交流の促進などの点から、九年間を見通したカリキュラムの開発をはかる。

校務分掌組織の開発：小・中学校ともに指導できるように兼務教員の発令を求めるとともに、学級担任制と一部教科担任制と教科担任制を学年段階に応じた指導体制の工夫をはかる。また、校務分掌についても、小中学校の垣根を越えて組織していくことが大切である。

職員室の経営：小・中学校の教職員のコミュニケーションや連携を生み出す観点から、職員室を一つにする。小・中学校の教職員のコミュニケーションの質や量が、小中一貫教育の成否に直接かわる。めざす目標を確認し、学習指導や生徒指導について話し合いを通して、ひとつの組織になっていく。その環境づくりをはかる職員室経営が問われている。ちなみに、品川区立日野学園の職員室は、小・中学校の教職員の一体化をはかる観点から、机の配列を学年毎ではなく校務分掌ごととしている。

その一方、小中一貫教育を進めるには、市区町村

教育委員会の在り方についても変化が求められており、とりわけ、次にあげるように、学校と市区町村教育委員会とのパートナーシップの在り方が問われているといえよう。

市区町村教育委員会と学校との間で意思の疎通を通して、小中一貫教育のめざすねらいについて共有をはかる。小中一貫教育に取り組むにしても、あるいは、三学期制から二学期制への移行をはかるにしても、それを導入するねらいや目的を明確にすることが重要である。

何をねらって実施するのか。そのことが不鮮明であるならば、折角の取り組みも中途半端なところに留まってしまうことになるであろう。小中一貫教育を導入することについて、学校と市区町村教育委員会との間でねらいを確認し共有をはかることが、その成否に大きくかわるといえよう。

市区町村教育委員会は、学校に対して将来にむけて教育のプランを明確に提示する。わが市区町村の教育をめぐる将来の構想を描き、それを管下の小中学校に示すということである。

小中一貫教育も市区町村の将来構想に適切に位置づけられることによって成果も得られるというものである。また、学校にとっても、教育委員会の将来構想やめざす方向性を知ることが、着実な取り組みをはかり成果を収めるためにも欠かせない。

いかなる将来構想のもとに小中一貫教育を位置づけ、どのような成果をねらうのか、学校と市区町村教育委員会とのパートナーシップのもとに創り出す。その相互の關係に、これからの学校と教育委員会の新たな姿があるといわねばならない。

【参考文献】 天笠 茂監修・呉市立五番町小学校・二河小学校・二河中学校 公立小中でつくる一貫教育 4・3・2のカリキュラムが拓く新しい学びへきょうせい、2005年・天笠 茂 学校経営の戦略と手法へきょうせい、2006年

伝えておきたいあの先生の授業、それはまさに達人の技・名人の境地。今回から、それらの先生方の伝説の授業の秘密を解き明かしていきます。

第1回は、前シリーズを担当していただきました有田和正先生の社会科の授業を、ともに筑波大学附属小学校で勤務された田中力先生にご紹介していただきます。



名人の授業 有田和正 先生

追究の鬼を育てる授業の秘密

國學院大學栃木短期大学助教授 田中 力

1. 子どもをゆさぶる「ポストの授業」

私が筑波大学附属小学校に赴任した1984年から、有田和正氏が附属小学校を去られた1992年の4月までの9年間、同じ学校に勤務し有田氏の授業に接する機会を得た。

その当時、有田氏が編集長を務める「授業のネタ 教材開発」誌（明治図書）のグラビアを担当していたこともあって、有田氏の教室にお邪魔することが多くなった。それは、私にとってまたとない勉強の機会となった。ファインダーを覗きながら、授業について多くのことを学んだ。教室に伺って授業を見る度に新しい発見があった。

有田氏が附属小学校を去られる間に撮影したのは2年生のポストの授業だった。有田氏がショックを受け、自分の授業を見つめ直すきっかけになったのは、奈良女子大学文学部附属小学校の長岡文雄氏によるポストの授業であったという。有田氏にとって長岡氏のポストの授業は永遠のモデルになっているというが、筑波大学附属小学校での最後の授業がポストの授業になったということに不思議な巡り合わせを感じる。

授業が始まった。

大きな画用紙を提示する。不完全な葉書である。

「この葉書を出そうと思うんだけど、いいかな？」

有田氏が問いかける。

「『おじいさん』だけではダメ！」

「切手がない！」

「郵便番号もない！」

「そんな大きいじゃダメ！」

子どもたちから次々に声が上がる。

「どんな手紙なの？ 裏も見せて。」

有田氏は、裏を返して子どもたちに見せる。白紙である。

「何も書いてないじゃない。」

「あぶり出しの手紙なんだ。」

すかさず、有田氏が切り返す。そのタイミングが絶妙である。

大きなケント紙を取り出す。

「これでポストができますか？」

有田氏が問いかける。

「ふたがない。」

「底もない。」

「手紙を入れる穴もない。」

子どもたちは、次々にポストの不備を指摘していく。

「穴のところに『東京』『その他』と書いてある。」

このあたりから、子どもは迷い始める。『東京』なのか『東京都』なのか、『その他』なのか『その他の地域』なのか？ 右と左のどちらに書いてあるのか？ 穴の上と下のどちらに書いてあるのか？ 文字の色はどんな色だったか？

ここでは結論は出ない。

「郵便のマークが書いてある。」

と発言した子どもが、〒のマークを黒板に書く。正しいマークである。有田氏はすかさずゆさぶりをかける。

「郵便マークは、いろいろあるんだよ。」

様々なマークを黒板に書いていく。

「これが沖縄、これが北海道。青森に行ったら、こんなのがありますよ。雪の多いところだと、こんなに下の棒が長い。見てきたんです。全部本当です。」

「そうだよ。そういうマークもあるんだよ。」

と言い出す子どもも出てくる。

有田氏はさらにゆさぶりをかける。

「ポストの色も赤だけじゃない。いろいろな色があるんだ。」



ポストの授業

ケント紙のポストから生まれた「はてな？」が、子どもの追究を促す。

「ポストに書いてある時刻はどこでも同じだよ。」

そして、最後に投げかける。

「このポストを学校の前に置きたいと思うんだけど...。」

「ダメ、ダメ！」

「紙じゃダメ！」

子どもは、自分がポストをいかにしっかり見ていなかったかに気づき、教室から飛び出していくことになる。

2. 有田氏の授業から学ぶこと

● 子どもとの「対応の技術」

有田氏の授業を参観する度に舌を巻く（有田式に言うならば「7回半」）のは、子どもとのやりとりのすばらしさである。

ポストの授業展開にもそれはよく表れている。

とほける、おかしいことを言う、もの分かりが悪い、切り返す、ゆさぶる、視点の転換を図る、ほめる...。これらをユーモアたっぷりに、そしてときには鋭く子どもたちに投げかけていく。こうした働きかけによって子どもたちは、簡単には納得しない粘り強い追究力と、ちょっとしたことでへこたれない強い意思とを身につけていくことになる。

こうした「対応の技術」はその場の思いつきやムードでできるものではない。しっかりとした授業計画があり、ねらいを具体的に把握しているからこそ、子どものどのような反応にも柔軟に対応していくことができるのである。

● 学び方・学習技能の体得

有田氏の授業では、1枚の資料をもとに展開されるものが多い。下の写真の「日本鋼管」の授業もそうである。黒板に貼られた1枚の製鉄所の地図をもとに、「日本鋼管が扇島へ移ったのはなぜか」が追究されていく。

有田氏は、授業における指導とは、見えないものを見えるようにすることであり、その追究の過程で学び方や学習技能を体得させていくことであるという。

見えないものを見えるようにするために、子どもたちの学習のしかたには目覚ましいものがある。考える、話し合う、資料（教科書、資料集、辞書、自分が持ってきた資料など）を調べる、ノートを書く。これらの活動が同時進行で進んでいくことによって、子どもたちは鍛えられていく。



日本鋼管の授業

1枚の資料から、子どもの多様な調べ学習が展開される。

参観者を驚かす有田学級の子どもたちは、日々のこうした密度の濃い授業の中で鍛えられ育てられていくのである。

● 基盤は学級経営にあり

温かな雰囲気 of 授業でありたいと思う。しかしそれは、奇異をてらった教材を使ったり、無理に笑いを強要したりするところからは生まれてこない。真剣な取り組みの中から生まれてくる自然な笑いこそが本物であろう。

有田氏の授業ではしばしば笑いが起こる。それは子どもたちの真剣な論争の中からたたくまずして生まれてくるものである。発言する子の顔には常にほほえみがある。それは、論争の激しさとともに、どんな考えでも温かく許容していくことが可能な学級集団という土壌の上につくられていくものである。

それを支えているのは教師の温かさである。時には辛辣な言葉を返しながらも、子どもの考えを真正面から受け止めている有田氏の姿勢が、授業に笑いをもたらしていることを感じる。

基盤は、学級経営にあるのだ。

● 教材開発とネタ

有田氏は、授業づくりの修業を重ねるうちに、教材が面白ければ子どもは追究するということに気づき、教材開発に力を入れるようになったという。開発した教材を子どもに提示し、子どもが熱中したものを「ネタ」というようにしたという。教材開発には、追究する子どもを育てたいという有田氏の願いが込められている。

「一寸法師」「便器の数から水道の学習」「さとうきびは沖縄の気象庁か」「十二単で平安時代の学習」「長篠の戦い」「大名行列」等々、小学校教師としての34年間におよそ800の「ネタ」開発を行ったという。子どもが熱中して取り組む「ネタ」が800というのはすごい。個性的で魅力的な膨大な数の開発された「ネタ」は、他の追従を許さない。

小学校教師の職を離れた現在も、精力的に「ネタ開発」を続けておられるのには敬服するのみである。

有田氏にとって教材開発はライフワークであるというが、最大の楽しみでもあるようである。



地図の見方を鍛える授業

1枚の資料で基礎基本を徹底的に追究させる。



大きな家族「バーンロムサイ」

— タイのHIV感染孤児とともに生きる —

HIV感染孤児の生活施設「バーンロムサイ」代表

名取美和



HIV感染孤児生活施設「バーンロムサイ」

タイ北部チェンマイ郊外にある「バーンロムサイ」には、現在エイズで両親を亡くし自らもHIVに母子感染した2歳から15歳の子どもたち30人が、タイ人や日本人のスタッフ、ボランティアと共に生活しています。一九九九年の開設当初、HIVに母子感染した子どもたちは2歳で孤児になり子どもたちの平均寿命は5歳と言われていました。そして実際にバーンロムサイでも開設当初から3年間に10人の子どもたちがエイズを発症、天国に召されてゆきました。それほどHIV感染の死亡率は高く、母親からHIVに感染した子どもたちの多くがエイズを発症、命を落とし続けたのです。

そのような状況の中一九九九年十一月、12人のHIV感染孤児を預かりバーンロムサイでの私の生活が始まりました。病気自体が新しい病気であること、また食餌や薬に関する情報等はアメリカ

の成人感染者を対象にしたもので、タイでは手に入りにくい薬や食材が多く参考になりませんでした。幼児感染者に関するデータはなく、すべてが手探りといった状況でした。当時アメリカ等の先進国では成人向けのエイズの発症を抑えるワクチンは存在しておりましたが、タイでは薬の供給が安定しておらず、またその効果も確実なものではありませんでした。

抗HIV療法の開始

そのような中二〇〇〇年のバルセロナエイズ国際会議でエイズワクチンの開発途上国でのコピー薬の製造を認める案が承認され、タイ薬事局がその薬の生産を始めました。10人目の子どもが亡くなった二〇〇二年十月、薬の供給が安定してきたということ、また時を同じくして信頼の置ける優秀なHIV専門の小児科医との出会いもあり、これなら子どもたちの服用が開始できると判断、翌十一月から早速抗HIV療法を開始しました。まず数値の悪かった5人からはじめましたが、服用後まもなくはめまいがしたりする子どももいまし

たが、それほど強い副作用も出ず、その効果も目に見えて現れました。まずは食欲が増進、ほろがふつくとし、薄くなっていた髪の毛の色が黒々としたりといった目に見える効果のほかに血液検査の結果、CD4の値（免疫力）も上がり、ウイルスの数も画期的に少なくなりました。子どもたちが元気になってきたのです。それ以降、誰一人亡くなることなく現在に至っています。

バーンロムサイからの 巣立ちに向けて

子どもたちは薬のお陰で今では元気に生活をしています。また新たな問題も出てきました。それは、今まで子どもたちの体を心配するあまり、彼らに甘えさせすぎてしまったのです。そのことが自立の足を引っ張ってしまったのです。命の心配をする必要がなくなった今、自分のことは自分でやるうとの取り組みが始まったばかりです。また彼らが大人になりバーンロムサイを巣立つとき、それぞれが手に職を持ち自立して生活できるようその準備を始めました。30人の子どもたちに



●庭の木に生ったマンゴーを手に



●お休みの日、ままごとをしながらお昼寝



●朝、学校へ出かける前に

は30の個性があります。それぞれ得意なもの不得意なものがあります。その得意なことを見つけ出すのが親の使命と考え、絵画、陶芸、踊り、運動、勉強、コンピュータ、料理、裁縫などを日本からのボランティアやタイ人の有志に教えてもらっています。まずは熱中できることに会って欲しい、そしてできることならばそれを仕事にし自信を持って巣立つて欲しいと願っています。毎日毎日12時間おきに死ぬまで飲み続けなくてはならない薬、HIV感染者として受ける差別と偏見、親が居ないという現実、多くのハンディを背負ってはいますが、ともかく自分を好きになってほしい、夢中になれることを見つけて欲しい、バーンロムサイの子どもたちにそう願っています。これから恋をするでしょう、その時相手に対しHIVに感染しているという事実を告知しなくてはなりません。また、HIV感染者の就けない職種もあります。健康者、そして、両親そろった人たちよりも多くの障害物乗り越えなくてはならない中、一番の味方は自分自身です。バーンロムサイでは何



偏見や差別を乗り越えて

かを成し得た時、評価する前にうまくできたことを褒めることを心がけています。何とか自分を好きになり自信がもてるよう、導きたいと日ごろ努力をしています。叱るより褒めよ！何であれ思いつきりとことんやれる状況を作る、小さな子どもの面倒を見ることを通し、誰かから必要とされていると実感する、親を含め目上の人を敬う、日ごろ私たちが子どもたちに対し心がけていることです。

エイズは確かに発症すると大変な病気ですが、人には簡単には感染しません。その辺のことを性に興味を持ち始める中学生の頃からきちとした性教育を日本でもして欲しいと願っています。HIVはどうすれば予防できるのか、またどうすれば感染するのか、これを知って欲しい。そうすれば無駄な偏見や差別を感染者は受ける必要もなくなります。HIVに感染しているという大変な事

実を背負っている上に、差別をされるのは大変苦しいことです。小さいうちから差別をしないやさしく思いやりのある子どもに育てるには、親のしつけと学校での教育しかありません。日本では、登校拒否の子どもたちが多いといわれています。バーンロムサイの子どもたちは学校に行けることがうれしく、毎日嬉々として授業開始時間の30分前には登校して行きます。もしも勉強が好きでなくても、学校が楽しければ、日本の子どもたちは「行くな」と言っても学校に喜んで行くでしょう。評価して競わせるのではなく、思いっきり遊んで、そして、学んだ子どもたちは素敵な気持ちの良し人間に育ちます。ですから勉強勉強と言って勉強させるのではなく、小さなときは両親と楽しく遊び語り、家族という一番小さな社会の中で学校という次の社会に行く準備をし、学校では、多くの人たちと交わり合い、そのなかで仲間を作り、それを通して人との付き合い方や距離のとり方を学び、準備万端整った社会人として学校生活から巣立って行くべきです。バーンロムサイではそれを実践しています。バーンロムサイの子どもたちは肉体的には大きなハンディを背負った孤児たちです。でも精神的には日本の物質的に恵まれた子どもたちに比べてずっと元気で健全です。子どもを謳歌することこそが、気持ちのよい大人になる大きな鍵なのです。私は多くのことをバーンロムサイの子どもたちによって気づかされました。

このままだと日本はギスギスとした居心地の悪い国になりそうで気が重なりません。少なくとも「誤魔化すな、嘘つくな、比べるな！」と日本の大人に言いたいのです！社会を鏡として子どもたちは育ってしまうのですから……。

静岡県

オオムラサキの飼育から学ぶ

富士宮市立富士見小学校校長
清 知行

本校は間近に霊峰富士を仰ぎ近くにクヌギ林、中庭には大エノキがそびえ立つ開校28年目の学校である。

本校の教育の大きな特色の一つとして国蝶オオムラサキの飼育活動がある。「校歌に『オオムラサキやヒバリまう』とあるけど、本物を見たことがない」という児童の声がきっかけとなって生息地から取り寄せ、地域の方々の協力を得ながら、飼育が今日まで途切れることなく続けられている。

本校では6月下旬に保護者や地域でお世話になっている方々を招いて「オオムラサキ集会」を開き、オオムラサキについて総合的な学習の時間などで観察したこと、調べたこと、オオムラサキを守る会の方々から聞いた話などをまとめ各学年で工夫し発表し合っている。3年生ではオオムラサキの体のつくりや成長など自分の課題とつなげて興味や関心を広げ、生き物を育てる苦労や発見の喜び、かけがえのない生命の大切さや羽化の神秘を、6年生からは飼育の歴史や伝統を劇で表現するなど全校で学び合っている。

オオムラサキ集会の翌日には、PTAが中心となりオオムラサキがこの地域にすみついて舞って欲しいという願いを込めて、児童と共に隣接した公園で、羽化した蝶を野に放つ「放蝶集会」も行っている。

本校には児童とPTAにもオオムラサキ委員会が組織され、守る会の方々から教えをいただきながらオオムラサキの観察・飼育と共に、ワタアブラムシ、アリやクモなどの外敵を駆除したり、生息するエノキやビニールハウスの手入れをしたりしながら、これからも伝統を守り、児童が学校や地域を大切に作る態度や生命を尊重する優しい心が一層育っていくことを願って我が校のシンボル、オオムラサキを育てていきたい。



北海道

キャップを救え！ 地球を救え！

旭川ライオンズクラブキャップレスキュー委員会委員長
加藤礼一

「キャップを救え！ 地球を救え！」を合言葉に、埋め立て処分されていたペットボトルのキャップを回収し、ベンチに加工する運動を1年間展開してきた。キャップの成分はPP（ポリプロピレン）であり、熱を加えてもダイオキシンの出ない優れた特性があり、木粉と混ぜて木質複合材に加工する。

旭川市では年間1600万本のペットボトルが消費されており、当然1600万個のキャップがゴミとして永久に土の中に埋め立て処分されていた。市内の小中学校をはじめ、住民センターや市役所、企業や病院など124か所に回収ボックスを設置。ポスターやチラシも作り、広く市民に呼びかけ、昨年の5月から1年間、回収運動に取り組んできた。その結果、587万個（全廃棄量の36.7%）12.9tのキャップを回収することができた。小中学校ではリングブルと同じく、家庭の分だけでなく、近所の方からの回収分も学校に持ち寄ってくれた。教育委員会やPTA連合会、各学校長もこの運動を理解していただき、小中学生だけで290万個、全体の半分を集めてくれた。

回収したキャップは11tダンプ3台に分けて北海道標茶町にあるカムイエンジニアリング（株）に搬入し、木粉と混ぜた複合材でベンチを6台作成、旭川市科学館（サイパル）の中庭に寄贈した。PPが入っているため、半永久的に腐ることがなく、しかも色落ちもしないため、永く利用していただけたと思っている。

今回のキャップ回収運動を通じて、子ども達の中に「環境」の大切さやリサイクルが現実としてベンチに生まれ変わった様子を見てもらうことで、身近に環境教育が実践されたと感じている。

子ども達がこのベンチに腰かけ、「地球環境」を守る話などしてくれたら、と願っている。



佐賀県

ふるさと「有田」を自慢できる子どもに

～全校で焼き物作りに挑戦～

有田町立有田小学校校長

深川明子

本校区は、佐賀県の西南に位置し、長崎県と接する狭小な谷あいの町である。また、約400年続く窯業の町として栄え、“日本磁器のふるさと”として歴史と文化が息づく町でもある。

学校の創立は古く、今年度創立135年目を迎える。地場産業である窯業（焼き物）を主軸に置き、地域の特性や人々のよさに触れるなど、地域と共に子どもを育てる「開かれた学校づくり」「特色ある学校づくり」に取り組んでいる。

本校は、平成9年度より、伝統文化教育に取り組み、全校で焼き物作りを実施している。焼き物の成形、素焼き、絵付け、本焼きまでの一連の体験を通して、児童一人一人に陶芸の楽しさを味わわせるとともに、地域の伝統文化への理解を深めさせている。

今年度は、新しい窯が入り、記念事業として5・6年生が磁器で「教室表示板」を作成した。また、児童一人一人が学年テーマに沿って、土鈴やお面、フォトスタンド等の焼き物作り（成形）を行った。12月には、全校児童の作品を一堂に展示し「校内やきもの展」を開き、作品の完成を地域の人と共に喜び合うようにしている。

このように伝統文化教育を進める中で、地元の陶芸家から直接指導を受けたり、調べ学習やインタビューをしたりする中で、伝統を受け継ぐ人々の思いや生き方に触れさせることができた。

子ども達は、有田に伝わる文化や伝統の良さやすばらしさを知り、それらを大切にしていこうとする気持ちが育ちつつある。また、この地で育ったことを誇りに思い、伝統を受け継いでいこうとする児童の育成につながっていくものと確信している。



広島県

9年間を一貫したキャリア教育

～夢と憧れを育む生き方学習～

呉市立二河小学校校長

田中春樹

本校は、呉市の中心部に位置し、隣接する五番町小学校と二河中学校の三校で、平成12年度から文部科学省の研究開発学校として「4・3・2区分による小中一貫教育」の研究実践を進めている。

三校では小中一貫教育のカリキュラムにより、「生き方学習」として1年生から9年生まで一貫した進路指導を実践している。前期（1～4年）は「人とのかわりの中で、自分のよさに気づく」、中期（5～7年）は「人とのかわりの中で、自分の可能性を追究する」、後期（8・9年）は「人とのかわりの中で、これからの生き方をさぐる」をねらいとし、自己の生き方を考える態度や人間関係をつくる力を育成している。

「生き方学習」では、1・2年の交流学習で自他の良さを認め、「あんなお兄さん・お姉さんになりたい」という憧れや自信を持ち、3年から8年生までの6年間を通して各学年のテーマに沿った職場訪問・職場体験を行うことにより、「働くとは・学ぶとは・生きるとは」を子どもたちなりに考え、義務教育の出口の9年生は自分の進路を自信を持って決めることができると考えて9年間を一貫して取り組んでいる。

三校の子どもたちは、3年生の「物を作る・売る仕事」から8年生の「自分の夢に近い仕事」まで、6年間をかけてスパイラルに継続して学ぶことによって、多くのゲストティーチャーに出会い、働く人の思いや働くことの意義を様々な視点から見つめることができた。「将来やってみたい仕事や夢がありますか」の問いに「全くない」と答える児童生徒はほとんどいなくなり、自分の夢を大きくふくらませている。

来年度小中一貫教育校開校に向け、私たちも小中一貫教育の夢をさらにふくらませていきたい。



日野原 重明著『十歳の君へ——九十五歳のわたしから』

(富山房インターナショナル)

人間、心、命、そして生きるとは

評者 児島邦宏(東京学芸大学教授)



「からっぽのうつわのなかに、いのちを注ぐこと。それが、生きるということです。」

「生まれてきたことは、それだけで素晴らしいことです。」

「人間ってすごいものだなあとわたし心がから思ふことは、人間には思いやりの心というものがあつて、見も知らない人のためにも自分の時間をつかえるということなのです。そんなことは動物にはできません。人間だけにできることです。」

「きみが今日流したなみだは、だれかのなみだをわかるためのレッスンかもしれません。」

一体、人間とは何ものなのか。命とは何なのか、心とは？そして何のために生きるのか、どう生きるのか。これらのことに、慈愛に満ちた力強い言葉で著者は語りかけていく。

なぜ、「十歳」なのか。そこには著者自身のつらい病気の体験、それ乗り越えていった十歳のころの心と体の成長、最も大きな自己の転機がある。

十歳といえば、自己に目覚めるころである。自分は一体、何ものなのかと自分を見つめるもう一人の自分が生まれてくる。自己認識、メタ認知が生まれてくる大事な時期である。

そうであるだけに、「夢をもって、ひたむきに生きよ」と語りかける。紙面の向こうに子どもを思い描きつつの対話が展開されていく。

他方、私たち大人は、この本をどう受けとめるべきか。まずは、「からっぽのうつわのなかに、今なお、いのちを注いでいたか、あきらめてはいなかったか」と反省する。とともに、もう一踏ん張りとして、力をみなぎらせる。

もう一つ、私たち教育に与るものは人生をこのように前向きに受けとめ、わかり易く、具体的に、自分の経験を内省しつつ、「私からあなたへ」と子どもたちに語りかけてきたらどうか。逆に、夢をつぶしてこなかったか。

教室で、教師と子どもが一緒にこの本を読み合い、心のキャッチボールが繰り広げられることを期待したい。

大野 裕著『「心の病」なんかない。』(幻冬舎)

日常の悩みを解決する手だて

評者 村岡 篤(明治大学教授)



自分の悩みからの解放を期待してカウンセリングを受けたクライエントが、洞察力豊かな人に成長することがある。カウンセラーが治療だけでなく、教育もしたのである。優れたカウンセラーのもとでカウンセリングを受ける過程で、特定の悩みから自由になれただけでなく、知らず知らずそのクライエントが、「悩み」を対象化する自分のありかたについても、カウンセラーから指針を得てしまったのである。本書の内容は、新聞のコラムとして執筆されたものを編集して構成されており、各一編2頁のごく短く読みやすい文章である。しかし、こうした短い文章の内から読者が読み解くことを期待されていることは、冒頭にあげた類の事柄であるように思われる。

それぞれの文章は、例えば、「まわりが見えない」というタイトルがつけられ、仕事が終わらぬ若い社員が、かといって忙しい上司を慮って相談できず、結果、仕事が滞るといった文章が続く、最後に大きめのゴシックで

見出し風に独立した行立てで「相手への気づかいは、まず自分を捨てることから」とまとめられる。この短い文章の仕掛けを通して読者は、まず、日常の典型的な人間関係を想像し、同時に生き生きとした臨床場面を想像するよう誘われる。次に、文章の中で行動する本人、相手、本人のもつ本人と相手を含む世界像、現実の関係といった構造を文章に当てはめて、筆者の医師としての解釈を読み解き、読者として本ケースから学習するよう導かれる。

読者としてこのような場面への立会いの経験を繰り返すと、異なる例を通じて、悩みを扱う方法がかすかに会得できたような感じがしてくる。臨床相談を受けながらの成長と呼んだのはこの意味である。筆者は医師として精神疾患は脳の病理で、心の病などでは断じてない、という立場と、精神疾患への明確なモデルに基づいて、日常に起こりがちな悩みを分かりやすく論じている。ただし、筆者のモデルを想像する楽しみは読者に残されている。

Column

10代心のカルテ その4

香山リカ（精神科医・帝塚山学院大学教授）



11 歳のマユミは、母親に連れられてやって来た。「先生、この子、誰もいないのにひとりで会話したりしてるんです。幻聴というのじゃないでしょうか。」

たしかに、この年齢でも幻聴や妄想などの病的症状が出現することはある。でも、はにかんだような顔で母親の影に隠れているマユミには、そういった症状を持つ人特有の不安感や緊張感は感じられなかった。学校では元気にクラスメートと遊んでおり、とくに問題もないという。

「マユミちゃんとは誰とお話してるの？」ときくと、「フタバちゃん！」と即答が返ってきた。お花の国からやって来た妖精のフタバちゃんが、いつも自分のそばにいて、話しかけると何でも教えてくれる、とのこと。

「ああ、やっぱり幻聴だ…」と母親は頭を抱えた。

「そ んなふうじゃ決めつける必要はありませんよ」と私は母親に言った。幼稚園から小学生にかけて、子どもは頭の中で「空想の友だち」をつくり出して、あたかも対話をしているように話したり笑ったりすることがある。その友だちは人形やぬいぐるみ、ペット動物のように見えるものであることも、完全な想像の世界のものであることもある。そういった「空想の友だち」は、母親と一

“空想の友だち”と対話するマユミ

体化された安全な世界から、厳しい現実社会に出て行くときの橋わたし役を果たすことが多い。

ひといいばい感受性が強くやさしいマユミには、11歳になってもときどきこの「空想の友だち」のもとで心を休める時間が必要だったのだらう。

薬剤師である母親は、子どもを甘やかすタイプではなく、「来年は中学なんだから」「せっかく算数が得意なのに」と、マユミにきちんと自立することを強く望んでいるような感じを受けた。

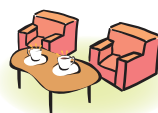
十 代前半の子どもの心、成長もまだまだアンバランス、ふだんはしっかりして見えてもときには甘えたいことだつてある。理性的に見える子どもでも、ときにはおとぎ話のような世界に浸りたいこともあるのだ。

「そうですよ、私もそういえば中学生くらいまで、ウサちゃんのぬいぐるみを抱いて寝てました」と母親が言つと、マユミは「えー、ママが！」と叫んだ。顔を見合わせてにつこり笑う母親、フタバちゃんの役割も、きつとそろそろおしまいだらう。

マユミはそのうち「空想の友だち」をすっかり忘れるはずだから、その前に彼女にかわって私はそつとつばやいた。「フタバちゃん、おつかれさま！」。

読者のページ

Educo Salon (エデュコサロン)



●ご意見・ご感想をお寄せください
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10
教育出版 Educo編集部
FAX: 03-3238-6975
e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●今日、全国あらゆる地域で都市化、核家族化、少子化が進み、それに伴って家庭や地域の教育力の低下が指摘されています。そのような中で、青木村では子どもを育てるために村民が一つになって教育に取り組んでいる姿に感動しました。特に村のお年寄りが子どもと一緒に授業に参加して子どもたちの学ぶ意欲を高めている実践や、保育園、学校、地域のボランティア団体、学生などが連携して、通学宿舎や村内ホームステイ等を行っている実践から、村全体が教育を中核においてよみがえっているように思いました。村の歴史と伝統、そこに暮らす人々の誇りを感じ、「義の心」に残っている青木村を一度訪れてみたい気持ちになりました。（北海道 瀬波金直）

●「原田先生へのインタビュー」と「村中みんなで子育てを」を読んで、特に共鳴するものがありました。その は、子育ては

みんなです。その は、子どもは子ども達の集団の中で。その は、子どもも大人も相互にいい関係で。その は、現状を悲観することなく、まず第一歩をなど、考えさせられました。今後も多岐にわたる内容を望むと共に、今の教育課題（不登校・退学・心・幼児化した大人たち……）の特集を期待します。（大阪府 高井建次）

●巻頭原田泰治先生のお話は感銘深く、ぜひとも多くの人々に知ってもらいたいと思いました。いろいろな面で人間は、ハンディキャップを背負って生きている今日であるだけに、「嘆いてばかりいないで、修復できることから実行していかなければならないと思っています」のくくりのことばが心深く残っています。次に、教育界の混迷の時代の中で、「フィンランドの教育に学ぶ」の庄井良信先生の論説は、いま、「学びの共同体」づくりが教育現場に求め

られており、大いに参考になります。「共同して学び合う教室で、人格の深いところから学びへの意欲と到達を回復していく子どもたちが生まれている……」は、まさに箴言です。（埼玉県 斎藤宥雄）

●「フィンランドの教育に学ぶ」を読ませていただき、現在、教職にある者に対する極めて示唆に富んだ指摘と受け止めております。日本と国内事情（子どもの現状）の違いがあるとしても、私どもが常に意識しておくべきことです。中でも、学びにおける「安心と自由」の保障（三つのシステム）においては、私どもが「わかっている（いた）ことですが…でも」であり、再認識させられました。昨今、「学力の向上」「教師の質の向上」への対応が叫ばれていますが、それらに向けた実践的なキーワードとして私の勤務する大学の学生に紹介したいと思っています。（青森県 久保富男）



目に見えないものを感じる心

清水市代さん(女流棋士)

◎父親に将棋の手ほどきを受けた清水さんは14歳で女流アマ名人になり、その後、高柳敏夫名譽九段に入門、16歳でプロデビューする。

プロの世界に入りまして、19歳のときに初タイトル「女流名人」をとったのですけれども、その頃、師匠の高柳先生から茶道を勧められました。タイトルを取ると人に注目されるようになるから、畳の上での立ち居振舞いなど礼儀作法を勉強したほうがよいと、表千家教授の高峰宗尚先生を紹介くださいました。入門の日、美しく気品にあふれ、包容力のある高峰先生に初めてお会いして、さわやかな風にふれたようなすがすがしさを感じ、一目で大好きになりました。

プロ棋士は毎日が勝負の世界ですから、片時も勝負のことが頭からはなれません。何をするにもこれは将棋にプラスかマイナスかと、すべて将棋に結びつけて考えていたのですが、茶道のお稽古に通うようになってから、そういうことを全く考えなくなりました。

茶室に入ると、将棋のことは一切忘れ、本当に無心になれるんですね。リフレッシュのひとときをもてたということは、自分にとってもものすごく大きいことだったと思っています。

◎自ら答えを出すように導いてくれる高峰先生との出会いから得たものは、数知れない。

高峰先生は茶道を通してたくさんの方のことを投げかけてくださっています。考え方や作法のみならず、さりげないアドバイスがたくさんいただいているのですけれども、その基盤にあるのは「目に見えないものを大切にする」という精神ではないかと思っています。

先生はよく「心」「気持ち」という言葉を口にされます。よい道具とか高級なお菓子とか、

目に見えるものはもちろん大事ですが、点てる者、招く者がもてなしの心という本分を忘れてはすべてが台無しになってしまいます。「目に見えないからわからない」ではなく、見えないものだからこそ、感じたときの喜びは大きい…。このように形として残らないもの、見えないものの大切さを教えていただきました。

◎ある日、思うような将棋が指せず、前日の対局も負けてイライラを募らせていた清水さんは、お茶の稽古に向かい思いがけない体験をする。

では口にはできませんが、私がお湯を茶碗へ注ぎ込んだとき、耳元で「大丈夫よ、みんなのパワーをもらっていきなさい」とそっと声をかけてくださったのです。先生のさりげない励ましに心に響きました。

そして、稽古を終えて自宅を後にし、百メートルほど歩いてから何気なく振り返ると、なんと先生が門口で見送ってくださいました。うす。私は思わず深々と頭を下げていました。うれしいというのを通り越して、心がふるえるような感謝の気持ちがこみ上げてきました。

◎茶道を通して学んだ精神は、厳しい将棋の世界でも生かされていく。

茶道でお茶を点てるときの細かい手順がたくさんあるんですけど、覚えての頃は、次はこうでその次はあでと頭の中で考えていたんですが、今では自然と手が動くようになりまして、高峰先生も「それが大切なのよ」と言われ、自然に動く所作の一つ一つに神経をはらっていくことの大切さを教えていただきました。

将棋も定跡とか手順というのがあって、それは考えなくても自然に指せるのですが、ただ手順だけを追って素通りしてしまっている自分に気づかされたんですね。もう一度改めて考えると、当り前の手順の中に新しい手が発見できたりします。

また、盤上で見えている指し手というのは実はほんの一部で、一手指すために実は何百手も何千手も考えているわけです。それらを凝縮していつ、その中から最善と思う手を自分で選び出していくのです。そういう意味でも、やはり見えないものの大切さということを実感しています。



1996年に女流四冠すべてを獲得し、史上初の全冠同時制覇。2000年に初の女流六段に。文部大臣表彰等を受賞。

●本号掲載の山田洋次監督への取材を終えたところで編集担当者の任期が終了し、校了を待たずに後任にバトンを引き継ぐことになりました。創刊時から小誌の企画・編集に関わってまいりましたが、読者の方々の励ましに支えられて、漸くEduco独自の編集スタイルが軌道に乗ってきたのではないかと思います。

●学校現場では、学力問題や生徒指導上の諸問題を抱えながら、近く明らかにされる新教育課程のもとで、課題解決に向けた新たな取り組みが求められることとなります。教育受難の時代にあって、小誌が先生方の実践上の一助として活用され、学校教育の充実にささやかながら寄与できることを願って止みません(U)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わるうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていくとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。